



女傑・広岡浅子 ③

地域史研究者
三善貞司

女性解放運動に痛烈な社会批判

キリスト教の慈愛に満ちた晩年の伝道活動

日本女子大学創設に尽力した広岡浅子は、明治37年（1904）日露戦争が始まると、「愛国婦人会」運動に参加、リーダーのひとりになっています。

この運動は義和団事件（日清戦争後、日本や欧米諸国の中国侵略に反抗した自衛組織が、北京の各国公使館を襲い、地域戦争になった事件）の視察に東本願寺から派遣された奥村五百子らが、悲惨な戦場を見て心痛し、戦・病死兵士の遺族や戦傷者の救済を目的に、結成した組織です。陸・海軍関係者や皇族・華族らの上流階級の人たちが参加しますから、この時代の浅子を軍国主義者のように非難する声もあります。たしかに愛国婦人会はのちに政府や軍部に利用され、女性の結束による軍事報国事業に発展、軍国思想を広めて「大日本婦人会」の母体となりますから、そう言えないこともありません。しかし浅子たちはもつと純粹でした。国のために死傷した人たちとその家族の苦痛を、少しでもやわらげようとしたりヒューマニズムの心から設立した組織です。戦地に慰問袋を送ったり、駅や港で兵士たちを送迎する運動も、浅子たちが始めたものです。とくに明治39年五百子が病没してから、浅子が中心的役割を果たしました。

女性の地位向上、男女同権、女性解放運動にも浅子は強くとり組んでいます。運動の機関誌「婦女新聞」が刊行されると執筆者の常連となり、とくに今まで女性は貞淑・従順・慈愛が最高の美德だとたたえられてきた社会的通念に猛反発し、「これらは男たちが女を従属させるために作りあげたモラルだ」と攻撃しています。その論調の激しいこと。同新聞にある女性記者が、

「（広岡女史は）君子とか聖人とかいう徳の人ではありません。歴史中の人物では北条政子にもっとも近いようです。ご様子は傲慢に見えるときもありますが、怒濤に耐えた大岩のような境遇が、しからしめたものでしょう。私でさえ叱責されて泣きだしたぐらいですが、それでも接近したい、ご人格にふれたいと尊敬する念は失せませぬ」と書いているぐらいです。

明治42年（1909）1月、浅子は胸部の腫瘍で入院します。60歳の時です。「手術しかない。命は保証できぬが」

と医師に言われ周りはびっくりします。医療技術は現在とは雲泥の差のある時代です。しかし彼女はにっこり笑って頭をさげました。

記録によると通常は25グラム必要だった麻酔剤が、たったの8グラムですぐさま昏睡したそうです。手術も短時間で済みました。

「麻酔で意識が失われていくとき、心の雲霧はすべて拭かれていくように思われた。なにかこうふしぎな力がわいてきて、どんな目にあっても平気だとの、すがすがしい気持ちになる。かつて覚えなかつた愉快な体験をしました」

「(病気は)お前はまだやることがある。それまで命は貸してやろう。…と天が命じたのだと思いました。死ぬより重い責任を背負わねばと、悟りました」
のちに彼女はこう語っています。

回復した浅子は、大阪基督教會牧師宮川経輝に師事、キリスト教に入信します。経輝は8歳年下、熊本洋学校学生時代に教授ジェンスが主催する聖書研究会に加わり、さらに同志社大学で新島襄に学び、卒業後大阪基督教會に赴任、以後40数年間栄達や利欲には目もくれず、ひたすら伝道活動を続けました。

経済的には恵まれず、食べることもままならぬ貧苦にあえぎながら、ついに千数百名の信徒をもつ教會に発展させ、大阪YMCAの土台に育てた生き方は、崇高というより壮絶だったと伝えます。

入信した浅子は社会事業、奉仕事業に専念しますが、とくに遊郭など売春産業で苦しむ女性たちの救出に尽力しました。

「体売る女たちを、何故に責めるのか。彼女たちがそうするのは、生きていく技能がないからだ。ではどうして技能を持たたのか。それは男たちが教育の機会を奪ってしまったからだ」

こう語る浅子の言葉に、男たちもうなづかざるを得ません。

明治45年(1912)日本キリスト教女子青年会の中央委員に就任、東京から北海道にかけて伝道の旅に出ます。大正7年(1918)には、大阪YMCA創立準備委員長になり、宮川経輝を助けて奔走しますが無理がたたり、翌8年東京麻布の別邸で死亡しました。享年70歳。

浅子はふだんから身の回りの人たちに、

「私は遺言なんかしませんよ。いつも言っている言葉が遺言だと思ってくださいね」

と語っています。教會で営まれた葬儀の参列者はおよそ2千人、さまざまな階層の人たちだったと記されており、彼女がどれほど多くの方々の敬愛の念を集めていたかが理解できます。著書には『一週一信』など数冊がありますが、文章もお上手です。

広岡浅子
実業家、嘉永2年(1849)
京都生まれ、女性の人権・地位向上に尽力。大阪愛国婦人会の指導者としても活躍。
大正8年(1919)没

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞